女系家族

山崎豊子

巻

文藝春秋新社

女系家族　下巻

昭和三十八年六月一日　初版発行

定価　四三〇円

著者　山崎豊子（やまさきとよこ）

発行者　小野詮造

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本
製函　加藤製函

© 1963 Toyoko Yamasaki　（万一落丁乱丁の節はお取換致します）

女系家族

下卷

装

釘

棟

方

志

功

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

第六章

佐倉峠を越えると、急に道の両側に峰々が嶮しく迫り、曲りくねった山道になって、鷲家まであと僅かな距離であった。

藤代は、梅村芳三郎と並んで、車の窓の外に見える雑木林を眺めながら、はじめて鷲家の山林へ来た時のことを思い返していた。あの時は二人の妹と宇市たちで、吉野の上千本で賑やかに桜見をし、そのあと宇市の先導で山見に来たのであったが、今日は、梅村芳三郎と二人きりで、鷲家まで出かけて来ているのであった。

二週間前に、芳三郎に会い、文乃が妊娠していたことと、宇市の案内で山見に行った結果を話すと、突如として、二人で鷲家まで山見に行こうと云い出したのだった。藤代は、腰に鎌をぶち込み、ぎょろりと眼を光らせた精悍な山守の姿を思いうかべ、その無謀さを止めると、「ともかく、二人で山林へ出かけまひょ、二号さんの妊娠も油断ならんことだすけど、大番頭の案内で行きはった山

見の話を聞いていると、辻褄の合わん妙な節がおますさかい、何よりもまず、それを確めに行くことが先決問題で、あんさんの相続分の相談は、それからのことだす」と云い、強引に山見に出かけることをきめてしまったのだった。

「まだ、心配してはりまんのんか」

耳もとで芳三郎の声がした。かすかに首を頷かせると、

「何も心配せんかてよろしおます、軍師がついてるやおまへんか」

と云い、芳三郎は自信に満ちた表情で、ゆったりと足を組み直し、車の背に体をもたせかけた。グレーのフラノのズボンに、紺と白のチェックのブレザーコートを羽織り、紫外線除けの色のかかった眼鏡をかけ、膝の上に地図を拡げている姿は、踊りの師匠というより、俊敏な青年実業家という方がふさわしい隙の無さであった。

急に道幅が狭くなり、車の前ガラスの右側に坂道が見えると、藤代は坂の上の段々畑の中に建っている藁葺の家へ眼を向けた。

「あの段々畑の上の藁葺の家が、山守の家だすわ」

藤代が指すと、芳三郎は半身を前のめりにし、

「運転手はん、あの坂の上まで、上れるところまで行っておくれやす」

気忙しく、車を急がせた。

坂道を上り、山守の家から一丁半ほど手前で車が停ると、芳三郎は、自分で扉を開けて降り、

「あんさんも、ご一緒に来ておくれやす」

と云うなり、先にたって急傾斜の坂道を上って行った。藤代は、車の中で履きかえたスポンジの

ゴム草履の足もとに砂煙りをたてて歩きながら、山守の戸塚太郎吉が、突然の藤代と芳三郎の訪問をどう受け取り、どんな態度に出るかが気懸りになっていた。

一ヶ月前に宇市と山見に来たばかりの藤代が、何の連絡もせず、いきなり、人を連れて、山見に訪れて来たとなれば、山守は不審の念を持つに違いないと思うと、地下足袋を履きしめ、腰に鎌をぶち込んだ山守の姿が、俄かに藤代の胸に不気味に思えて来た。

山守の家の前まで来ると、芳三郎は、足を止めて、藤代の方へ振り返り、

「よろしおますな、さっき、車の中で云いましたように、私のことは踊りを習うている師匠といわずに、将来、あんさんと結婚するかも解らん間柄の男という風に匂わしておくことだす」

小声で念を押すように云い、山守の家の表戸に手をかけた。

「ご免やす、戸塚はん、いてはりまっか」

「へい、どなただんねんげよう」

中から山守の女房らしい女の声がした。

「大阪の矢島屋からだす」

芳三郎が応えると、モンペを履いた中年の女が顔を出し、頑丈な表戸を引き開けた。薄暗い土間に陽が射し込み、正面の長押の上に掛け並べた六、七挺の鎌が、ぎらりと鋭い刃先きを見せていた。

「あんたはんは、矢島はんのどなたはんだんねん」

上框から太い男の声がし、芳三郎の背後にたっている藤代の姿に気附くと、

「ほう！　これは、この間の嬢さんやあらへんか、今日はまた、なんぞの用事で――」

山守の太郎吉は、急に用心深い表情をした。

「この間は、いろいろとお世話さんでおました、今日は、もう一度、ちょっと、うちの山林へ行ってみたいと思いまして、ご足労はんでおますけど、また山案内をしておくれやす」
この間と打って変った愛想のよさで挨拶すると、
「この人は、どなたはんだんねん」
胡散臭げに、芳三郎の方を指した。
「こちらは、この節、私と特に懇意にして戴いております方で、いずれ、そのうち……」
と云い、あとは、わざと云いにくそうに言葉を濁らせると、
「へえぇ、さよか、特にご懇意な間柄のお方というわけだっか、それで、お二人で山林を見なはって、どないしはるつもりだんねん」
太郎吉は、芳三郎の方へ露骨な眼を向けた。芳三郎は、色のかかった縁なし眼鏡の底から、ぬらりとした表情を見せ、
「別にどうということはおまへんけど、二、三日前に、二人の間で、山の話が出て、吉野の新緑を観かたがた、二人で山林へでも行ってみまひょかと、いうことになりましたんだす」
「そうすると、吉野へお娯しみかたがた、山見というとこだっか」
太郎吉の顔に、淫らな笑いがうかんだ。藤代は、きっと気色ばみかけたが、芳三郎は、口の端に同じような淫らな笑いをうかべ、
「まあ、そういうことにもなりまっさかい、はた迷惑な話かもしれまへんが、もう一回、案内をしてほしおますねん」
というなり、上衣の内ポケットから白い紙包みを出し、

「これは、ほんのおしるしだす、なんぞ、手土産にと思うたんだすけど、まあ、これにさせて貰うときまっさ」
と云い、太郎吉の前へ熨斗のかかった祝儀袋を置いた。
「今日の祝儀の先貰いというわけだっか」
太郎吉はそう云い、じろりと祝儀袋へ眼を遣り、
「大番頭はんは、今日のことをご存知だっか」
「いや、急に思いたって来ましたさかい、矢島屋の大番頭はんには何にもお伝えしてまへんけど、山林のことは、何でも一々、あの人に断らんといかんようなことでもおますのでっか」
芳三郎が逆手に取って、そう問い返すと、
「いや、別にそんなわけは、何にもあらへんけど――」
太郎吉は、やや口ごもり、
「よろしおます、ほんなら、山案内致しまひょ」
と云うなり、眼の前の祝儀袋を摑んで、奥へ入り、山行きの装束に着替えて出て来ると、土間の長押の上に掛った鎌を一挺取り、
「ちょっと待っておくなはれや、鎌研ぎをせんならんよってな」
と云い、土間の真ん中へしゃがみ込み、砥石に水を湿して、しゅっと鎌の刃を研ぎ出した。鋭い摩擦音と乳色の研ぎ水が土間に飛び散り、半月型の鎌の刃先が、忽ち、鏡のように研ぎ磨かれ、太郎吉は、ほっと肩で息をつくと、手を止めた。鋭い冴えを見せた刃先を陽にかざすようにして柄を持ち、ゆっくり起ち上ると、太郎吉は不意に、土間の隅に積み上げた薪束に向って、大きく鎌を振

り上げた。ばさりと、薪の切れる音がし、一振で切断された木切がばらばらと、乾いた音をたてて、土間に散乱した。藤代は、ぎくっと身揺ぎしたが、芳三郎は瞬き一つせず、

「何に使いはるのか知りまへんけど、なかなか、ええ切れ味でおますな」

平然とした表情で、鎌の刃先を眺めると、

「山へ入る時は、鎌一挺がわしらの味方にも、敵にもなりますのでな」

凄むようなふてぶてしい笑いを見せて、鎌を腰にぶち込み、

「さ、そろそろ、出かけまひょか」

云うなり、先にたって表戸を開けた。

山へ入ると、太郎吉はこの間と同じようにむっつりと不愛想に押し黙り、大股に山道を踏みしめるように登って行った。二、三日前に雨でも続いたのか、木立に囲まれた山道は、この間以上に濡れ湿った落葉に埋まり、足を滑らせがちであった。藤代は、足もとの悪さに気をつけながら、太郎吉のうしろに随いて歩き、時々、芳三郎の方を振り向くと、芳三郎は、藤代より五、六歩遅れて登りながら、何を見調べているのか、しきりに山道の両側の杉木立を見上げるように眺めていた。

小一時間ほど、山道を登り、谷川にかかった丸木橋のところまで来た時、藤代は、ふと妙なことに気附いた。この前、宇市と来た時は、丸木橋がたしか右手にかかっていたはずであるのに、今日は左手にかかり、川幅も、川の流れの激しさも異っているように思えた。そう思えば、さっきから

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

急に爪先上りになっている山道は、この間と同じような杉木立に囲まれているが、その傾斜の度合が嶮し過ぎるようであった。藤代の胸に、ひょっとしたらという不安な思いが掠めた。

「山守さん！」

太郎吉のうしろから声をかけた。太郎吉の足が止まり、黙って振り向いた。

「この道は、この間、私たちが登った道と同じ道でおますかしらん――」

さり気なく切り出しながら、藤代はじっと太郎吉の顔に視線を注いだ。

「ああ、この間の道は、二、三日前の雨で傷んだんでな、樵夫らが直しておりまんねん、それに今日は、あんたはんの足ごしらえも出来てるし、お連れはんも、しっかりした足もとだっさかい、ちょっと嶮しおますけど、この道にしましてん、あと二、三十分のほどのことだんねん」

と云い、太郎吉はまた、先にたって歩き出した。

谿流に沿った山道は、嶮しく曲りくねり、急峻な崖道になったが、藤代と芳三郎は、太郎吉の足もとを見据えるようにして、用心深く歩いた。谷間の急湍の流れが耳をうち、密林のような雑木林の中から風にそよぐ枝音が、不気味な静けさで鳴っていた。

俄かに眼の前が明るくなったかと思うと、平坦な尾根の上に出、左側に濃密な杉林を持った斜面が拡がり、低い雲の流れが緑の濃淡の襞を取るように影を落していた。

「そこが、おたくの山林だんねん」

太郎吉は、左側の斜面の拡がりの一番手前の山林を指した。

「ほう、あれだすか、なかなか木の育ちのよさそうな場所だすな」

藤代のうしろから芳三郎の声がし、太郎吉と並んで尾根の端にたち、

「陽あたりと水捌けの工合が良さそうで、傾斜の度合も緩やかで、同じ山林でも、これなら立木の値段からして、違うて来まっしゃろ」
立木の値踏みをするように云うと、
「山の地場だけでは、ええ立木は育ちまへん、木の守りの仕方によりまんねん」
と云うと、太郎吉は不機嫌に黙って、芳三郎の傍を離れた。
杉林の前まで来ると、太郎吉は腰の鎌を抜き、熊笹の枝を払った。研ぎ澄まされた刃先に熊笹が紙片のように切れ、忽ち足を入れる小道が開けた。一歩、山林の中へ足を踏み入れるなり、ひやりとした冷気が身にしみ、杉の巨木の蓊蒼と覆いかぶさるような暗さが体を包んだ。藤代は、太郎吉のうしろを歩きながら、この間、この山林へ入った時の小道を探した。あの時も同じように、太郎吉が鎌で熊笹を薙ぎ払って道を作ったのであるから、あれから一ケ月程しか経っていない今日は、まだ道が残っているはずであったが、見渡す限り、膝下まで熊笹と雑草に覆われていた。
「この間の道は、何処でっしゃろ、見当りまへんわ」
たち止まって、辺りを見廻すと、
「この間は、向うの道を登って来たんだっさかい、入り口も、今日と逆の方向から入って来てまんねん」
「ほんなら、ちょうど今、たっている場所と反対の方向でおますな」
と云いながら、藤代は、そこで、この間、見附けた境目標の在り場所の目処をつけていた。そこから十米ほど奥へ進んだ窪地まで来ると、太郎吉は足を止めた。
「だいたいこの辺が、矢島屋はんの山林の中心になりまんねん、十町歩もありますさかい、全部、

歩き廻りはるのは無理だんな」
と云い、下草を払っていた鎌を腰に挾み込んだ。芳三郎は、窪地にたって、ぐるりと周囲を見廻し、
「ここの境目標は、どこにおますのだす？」
不意にそう切り出すと、太郎吉の眼がぎょろりと鋭く光り、
「境目標を改めんならんようなことが、何かあるというわけだっか」
凄むような声で云った。
「いや、別に何も、わけはおまへんけど、せっかく山林へ来たんでっさかい、一回見ときたいと思いましてな、矢島屋の大嬢さんの話では、ちょっと変った面白い標やそうだすな」
呆けるように云うと、藤代は、
「それやったら、私が案内しますわ、覚えてまっさかい」
と云い、先に来た道と反対の方向に熊笹を踏みしだいた。裾短かに端折った塩沢の着物の裾に、下草の茨が刺さり、熊笹の枝が擦れ、背後に鋭い太郎吉の視線を感じたが、藤代はどんどん先にたって歩き、急に杉の木が疎らに並列したところまで来ると、
「若師匠さん、これでおますわ」
杉の幹の地上から六、七尺の高さの処に、樹皮を四角に削り取り、そこに字が焼き込まれている境目標を指した。芳三郎は、太郎吉の視線を意識し、
「ああ、これが境目標というもんだすか――、えらい読みにくおますな」
と云いながら、境目標に顔を近寄せ、

「何やら所有林、昭和三十二年三月改と書いてありますけど、肝腎のところが消えておますな」
わざと、訝しそうな顔をした。
「いや、それは、えらい読みにくなっとりまっけど、矢島所有林と書いてありまんねん、誰ぞの悪戯か、雨滴の流れや溜り工合で偶然、そうなったんだんねん」
「そうだすか、それやったらよろしおますけど、わざと境目標を曖昧にして、妙な手だてをする奴もあると、山持の知合から聞き及んでいますさかい――」
持って廻った云い方をすると、
「と云いなはるのは、どないな意味だんねん」
太郎吉の眼が、険しく光った。芳三郎はじろりと、太郎吉の顔を見返し、
「と云うのは、たとえば、山林の地床だけ残して、立木を売り飛ばしたり、隣の山林所有者が、こっちの境界を侵して植林して、十年間、こっちが知らずに文句をつけずにいると、侵された分だけ、向うの所有になってしまう山林法があるのを利用して、隣の山林所有者と結託して、わざと境目標を曖昧にして、植林を入り込ませ、その分だけ、分け前を貰うというあくどい手合もおるらしおますな」
裏をかくような云い方をすると、
「あんたは、えらい山林のことに詳しいでんな、この間、嬢さんがえらい山識りやったのは、案外、あんたが軍師やったというわけだんな」
と云い、油断のない眼で芳三郎の方を見、
「けど、あんたの今、云いなはったような心配は、どっちもあらしまへんわ、そない心配やったら、

登記所へ行って登記簿でも調べなはったら、どうだんねん、この山林の伐採権も、地番もちゃんと載っとりますわ」

太郎吉は、大見得を切るように応えた。

「ほんなら、何時が、立木の伐り時でおます？」

藤代が、口を挟んだ。

「えっ、あんたはんが、この山林の木を伐りなはる――」

太郎吉の顔色が、かすかに動いた。

「伐採権がうちのものなら、何時、伐ってもよろしいはずやおまへんか、それとも、何か工合の悪いことでもあるというわけでおますか」

「いや、工合の悪いことなど、何にもあらしまへん、ただ、これだけの成木林を伐るのに、あんまり話が急だっさかい、それに伐り時としては、今は悪い時期だんねん」

「へええ、何でおます？　春は木に水気があって、伐り時やというやおまへんか」

藤代がさらに、畳み込むように云うと、

「それが、今年は三月の末まで雪が残り、立木の成育が悪うて、水気の質も、もう一つだっさかい、来年の秋にしなはった方が、たった一年半程のことで、成育が良うなり、切口に赤味がかかり、杉皮もきれいな色に剝けて、立木の石当りの値段がうんと違うて来まっさかいな」

「そうすると、石当り、なんぼになりますねん？」

芳三郎が、口を出した。

「そうだんな、今年伐ったら、石当り千五百円、来年のええ伐り時を選んで伐ったら、石当り二千

円ぐらいになりまっしゃろ、なんし、立木というもんは、伐り時に伐ったのと、そうでないのとでは、色から木肌から、ころっと違いまっさかい、悪いこと云いまへん、山林のことは、山守のいうことを聞きなはることだす、第一、そうしはらんと、伐採の時の樵夫の木の伐り方次第で、一本の木の長さが一尺ずつ短こうなっても、一町歩四百石の出来高とすると、えらい違うて来るよってな」

せせら笑いをするような云い方をした。

「なるほど、こっちが強引に伐るというても、樵夫を使う山守の腹の持ち方一つで、どうにでもなるというわけだすな」

芳三郎は、そう云うと、思案するようにちょっと黙り込み、藤代の方を向き、

「今日のところは、預りということにしまひょか」

と云うと、藤代はそれには応えず、

「山守さん、もう一つの山林へ案内しておくれやす」

「えっ、もう一つの山林――」

「そうでおます、この間、宇市が、よう生えとります！　よう生えとります！　と雀躍するように指した、もう一つの十町歩の山林のことでおます」

と云うと、太郎吉の眼がぎょろりと光った。

「ああ、この向うの峰の山林のことだっかいな、ここから、あの山林までは尾根伝いに二里もありまっさかい、女はんの足ではまず無理だっしゃろ、それに、ちょっと空模様が悪うなって来てまっさかい、またのことにしなはったら、どうだんねん」

「またのことて、今日はあの山林を、見に行くのを楽しみにして来たのでおますさかい、女の足で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c